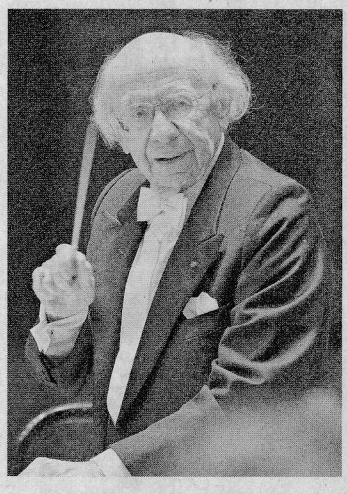
文化 歴史

# ロジェストベンスキー氏を悼む

## 柔和な人柄 量感豊かな音楽

東条碩夫



16日、87歳で死去。写真は2017年5月19日、東京芸術劇場で行われた最後の来日公演で（読売日本交響楽団提供）

並みいるロシアの名指揮者たちの中でも、ゲンナジー・ロジェストベンスキーは、日本のファンにとりわけ愛された存在だった。

軽快なリズムの曲を指揮した時には、いつもその最後の音に合わせて客席を振り向き、両手を拡げて肩をすくめ、「という具合ですが、お気に召しましたかな？」という顔をして聴衆を笑わせ、和やかな雰囲気にさせる。そういう明るさを最晩年まで持っていた人だった。

名指揮者ニコライ・アノーソフを父にモスクワで生まれ（ロジェストベンスキーは母方の姓）、モスクワ放送交響楽団をはじめ、ボリショイ劇場やソビエト文化省交響楽団（のちのモスクワ・シンフォニック・カペレ）、ストックホルム・フィル、BBC交響楽団など、多くのオーケストラの芸術監督あるいは首席指揮者を務めた。1972年のモスクワ放送響との来日では、作曲されて間もないショスタコービチの「交響曲第15番」を大阪で演奏、それがこの曲の国外初演ということもあって、とりわけ印象深い出来事として記憶される。

彼がオーケストラから引き出す音楽は、厚みのある重低音を基盤とした量感豊かな音響構築、色彩感に富む音色、緊迫感にあふれる劇的な高揚などを大きな特色としていた。

日本では1979年以降、読売日本交響楽団と密接な関係を持ち、しばしば客演して多くの名演を残したが、近年の演奏の中では、たとえばチャイコフスキーの歌劇「イオランタ」（2007年）でのきらきらした色彩の変化や、ショスタコービチの「交響曲第10番」（2016年）での陰翳に富む表情などは、私たちに深い感動を与えたものである。

日本での最後の指揮は昨年5月の読響とのブルックナーの「交響曲第5番」で、この時は往年の名指揮者シャルクが改訂した珍しい楽譜を使用、金管群や打楽器群を輝かしく響かせ、ファンを熱狂させたのだった。

あのにこやかな風貌を、日本の聴衆にもう一度、見せてもらいたかった。（音楽評論家）